

全国の過疎高齢社会で何が起きているのでしょうか？

「過疎高齢社会で困ることは何ですか？」と問い、「困ることカード」を書いてもらってイメージを浮き彫りにしてみました。以下は、佐渡よりも過疎高齢化が進行している全国100箇所の地域のうち、60箇所に調査し寄せられた「困ることカード」をまとめたものです。

その特徴は、人口の多少にかかわらず同じような現象がおきていることでした。過疎にはゴールはなく、人口が減少する過程で、少しずつ、どこまでも産業や生活に不都合なことがおきる状況がありました。家庭、集落、地域、組織、企業、そして産業におきていること全てに、過疎を原因とする「困りごと」が起きていました。

過疎は、人の身体を少しずつ蝕む病気のようなものであり、人々の減少は、急激には進まないため、目に見えにくく危機感が希薄になります。しかし、間違いなく将来の発展性や可能性を狭め、地域や産業を子ども達に引き継ごうとしている・・・これが結論でした。アメリカインディアンには、「この大地は先祖から引き継いだものでなく、子孫から預かったものだ」という主旨の言葉があるといいます。佐渡においても、同様な状況が出ておりました。(略：佐渡の困ること調査結果)

わかったことはもう一点ありました。

小さなカードをまとめると体育館半周する規模となる作業、その過程でわかったこと、それは過疎での生き方として、攻めと守りを明確にして各々対応することでした。

**守りの対応**：過疎の困りごとの多くは、生活や働く場の周辺で、多い人数で行っていたことを少ない人数で行うためにおきます。少ない人数でできるシステムができない(作らない)うちに、対応を迫られるので無理(無茶)な頑張りが必要となってくるのです。それは、ちょうど、売上減少が続くと赤字となり、対症療法がつつくのと同じです。しかし、早めの経費削減で同じ売上減少がありながら黒字となり、その後の決定的な打撃を避けられるように、早めはやめの対応でかなりの部分が楽になるのです。家庭、集落、地域、組織、企業、産業で、各々の立場において、かつての生活改善運動のような、崩壊しないための守りの再生運動が必要でしょう。

**攻めの対応**：これは、企業でいえば研究開発のように明確に積み上げていることが見え、新製品開発のように具体的で明確に見えるものでなければなりません。〇〇振興的なものは守りの戦略となっても、ここでいう攻めには該当いたしません。この分野の特徴は、頑張る地域、頑張る組織といっても、よくみるとグループの力が大きいことがわかります。このような・・・コトをおこせる人づくりと、そのグループ育成、そして、それらのネットワーク化・・・この中で、地域の元気よさ、組織の元気よさは生まれ、新しい括りの生活コミュニティや組織などの文化がうまれるのです。

以上、崩壊しないための守りのシステムづくり、選ばれ元気が出るための攻めのシステム・・・この明確な使い分けの必要性・・・それが、全国過疎調査からわかった結果でした。